

令和4年度 東京都立荻窪高等学校 学校経営報告

本校は、昼夜間定時制高校として、三部制、単位制の特色を生かし他校では実現できない多様な学びの場を提供することで、個に応じた丁寧な教育活動を行っている。今年度も新型コロナウイルス感染症対策が続いたが、教育活動を止めることなく、できるだけ通常に近い形で様々な取り組みを行った。

学習指導においては、授業改善の取り組みとして「面白い・分かる・もっと受けてみたい授業」、生徒が積極的に取り組もうとする授業を目指した。今年度は、新学習指導要領実施の初年度であり、評価の仕方についても観点別評価導入もあり、検証しながら実施した。生活指導においては、生徒一人ひとりの様々な状況に配慮しつつ、将来、社会人として必要な生活習慣やマナー等の育成を図った。進路指導については、多様化が進む進路希望に沿って、個々への丁寧な対応を行った。進路決定率は8割を若干下回ったものの、高い割合を維持することができた。また、昨年度から組織した総合支援部を中心に、様々な課題を持つ生徒への配慮や支援を行った。外国ルーツの生徒への日本語教育や発達障害のある生徒への通級による指導をはじめ、生徒が学校生活を送る上での課題を改善すべく取り組んだ。

これらの取り組みは、一定の成果を上げているが、課題も少なくない。次年度以降、「誰も置き去りにしない荻窪高校」を理念として一層改善を重ね、取り組んでいきたい。

1 今年度の取組目標と方策に対する自己評価、課題及び改善策

(1) 教育活動の目標と方策

①学習指導

ア スクール・ポリシーを実現するための指導方法を具体的に研究し、実践する。本校の年間授業時数の実態を踏まえた年間指導計画を策定するとともに、学習の遅れがちな生徒への授業を補う指導の工夫を図る。

イ 「面白い・分かる・もっと受けてみたい授業」で学習意欲を引き出し、「主体的・対話的で深い学び」を追求した授業実践により積極的に授業に参加する姿勢を育成する。

ウ 生徒の学力とその変容を把握し、「生徒を伸ばしているか」を常に検証し、指導改善につなげていく。また、生徒自身が客観的に自分の学力を把握し自己肯定感を持たせるとともに、進路実現に向けた課題を明確にできるように授業毎の目標設定の明確化や外部模試、検定試験等の活用を奨励する。

エ ICTの活用を推進し、効率的、効果的な学習活動につなげる。

<重点目標と方策>

ア 「面白い・分かる・もっと受けてみたい授業」を実現するために、授業力向上委員会を中心とした授業改善研究、ICTを活用しオンデマンド方式も取り入れた相互授業研究、生徒による授業評価を実施し、授業改善に生かす。

イ スクール・ポリシーを実現するための指導方法を具体的に研究し、実践する。本校の年間授業時数の実態を踏まえた年間指導計画を策定するとともに、補習補講等による学習の遅れの支援や「荻探」により意欲のある生徒の主体的な学びの支援を充実させる。また、出席停止等の生徒への学習保障をする。

ウ 年2回の基礎学力診断等により学力の変容を把握して、進路指導とともに学習指導の改善にもつなげる。更に、生徒に自己の学力や資質を理解させる目的からも各種検定試験を奨励する。

エ 1年次の一人1台端末の活用を進めるとともに、2年次以上についても同等のICT活用を進める。

【自己評価と課題及び改善策】

ア 昨年度、授業改善プロジェクトチームを立ち上げ授業改善に取り組んだ。今年度はこのプロジェクトチームを授業力向上委員会として取り組みを継続した。この授業力向上委員会が主体となり「授業力向上通信」を8編発行、有志による授業公開を8回実施（見学教員数延べ59名）、生徒への生徒授業アンケートを実施した。個々の授業者の教科の専門性や個性的なアプローチ等を共有し、自身の授業に取り入れ、生徒の学習意欲を引き出すことに成功する事例が報告された。このムーブメントをより濃いものにしていくために、職層に応じた教科内での教材・授業研究の活性化につなげ、「面白い・分かる・もっと受けてみたい授業」を実現するための様々な工夫を進めていきたい。授業評価アンケートでは、「面白い」「分かりやすい」授業の評価が高く、「わからないところを復習もしながらゆっくり丁寧に教えてくれる」授業を望んでおり、今後の授業改善ではこれらの結果も踏まえていく必要がある。

イ ICT活用については、1年次の一人1台端末は、ほとんど全ての講座で活用し、約7割の講座で月に

1 回程度以上、その内約 6 割は週に 1 回以上、また、ほぼ毎時間活用している講座も複数あった。2 年次以上については生徒個人所有のスマートホン等の活用を進めたが、月に 1 回程度以上活用した講座は約 6 割であった。教科科目の特性もあり使用頻度には差があるが概ね活用を進められている。しかし、端末の持参やアカウント管理の状況には課題があり、生徒の端末利用に対する意識の向上が更に必要である。また、授業評価アンケートでは ICT 活用そのものより画像や映像の提示を取り入れえた授業や分かりやすい授業を望む声が多く、ICT の活用の仕方も工夫していく必要がある。また、「荻探」は、残念ながら最後まで取り組んだ生徒はいなかった。

ウ 観点別評価の実施と見直し、学力スタンダード事業における分析を通じて生徒の学力を適切に評価することができている。しかし、教科によっては専任教員と時間講師との連携が不足していることが見受けられるので、改善していきたい。基礎学力診断等を 4 月と 12 月に実施した。受験率がそれぞれ約 7 割、4 割と低いことが課題である。結果はホームルームにおける面談指導等で活用しており、卒業後の進路が明確な生徒にとっては効果的に活用されているが、進路が定まらない生徒に対する活用方法については課題がある。受験率向上と活用方法について改めて検討する必要がある。また、実用英語技能検定、日本漢字能力検定、日本語ワープロ検定、日本ニュース時事能力検定等に積極的に挑戦することを推進したが、結果的に合格者は昨年比約 65%と大きく減少した。一方、ボランティア活動の活動報告は 14 件報告されており、昨年度の 6 件から大きく増加している。

エ ICT 活用については、前述のとおりで、生徒一人 1 台端末の活用において、各教科が創意工夫を凝らし、生徒の端末操作等の技能を向上させるべく取り組んでいる。学校紹介動画にも一例を紹介している。

【学校評価アンケート結果より】

授業について

①「教科書の内容を生徒自身が自分に引き付けて考えられるように授業内容を工夫しているか」という内容の質問に対して、生徒の 73.1%が肯定的な回答をし、教員は 79.5%が肯定的な回答をしている。保護者も 66.6%が肯定的に答えている。保護者は「荻窪高校のことについて子供とよく話をしているか」という質問で 66.7%が肯定的に答えているのとほぼ同じ割合である。

②「本校の多くの先生は、中学校レベルでの質問でも馬鹿にしたりせず、親身になって向き合ってくれる」という内容の質問に対して、生徒の 87.9%が肯定的な回答をし、教員は 87.9%が肯定的な回答をしている。

このことから教員の工夫を生徒は実感として感じているということが出来る。教員の授業改善の成果があがっているということが出来るのではないかと考えられる。

②進路指導

ア 本校キャリア教育ツール「進路ノート」を活用し系統的なキャリア教育を実施する。

イ 進路指導部と各年次、総合支援部、外部人材も活用した自立支援チーム等の連携による組織的な進路指導により、進路決定率の向上を図る。また、卒業時進路未決定生徒の継続支援を確実に行う。障害や課題のある生徒、日本語を母語としない生徒等の確実な進路実現を目指す。

ウ 資格取得を奨励し、読書活動、インターンシップや体験活動を充実させることにより多様な考えに触れ、多くの情報を収集し、それらを活用する能力や表現力、相手の立場を踏まえた適切なコミュニケーション能力を培い、自己理解を深め、自らの将来を考える力、進路を切り拓く力を育む。

＜重点目標と方策＞

ア 「進路ノート」を活用し、入学時から系統的なキャリア教育を実践する。

イ 進路希望の実現を図る。卒業時の進路未決定生徒や退学生徒への継続支援を更に計画的に実施する。また、課題のある生徒、日本語を母語としない生徒の進路決定は YSW や関係機関との連携、進路開拓など特に必要な措置を講ずる。

ウ 資格取得を奨励する。また、インターンシップや体験活動等の進路行事及び面接指導等を充実させることで自らの将来を考える力、進路を切り拓く力を育む。

【自己評価と課題及び改善策】

ア 各年次ごとに「進路ノート」を活用した系統的な進路指導を実施した。

イ 進路決定率は、これまで 8 割を超える高い水準が続いており、今年度もまた、77%であったがここ数年の数値は下回ってしまった。このところ進学希望が増えており、進学指導について内容を検討していく必要がある。就職に関してはハローワークの協力を得ながら取り組んだ。特に、障害者手帳を持

つ生徒、日本語を母語としない生徒の就職ではハローワーク、ユースソーシャルワーカー等と緊密に連携することができた。また、事前に体験も兼ねてアルバイトで雇用していただくなど企業からの協力を得ることができた。

ウ 学校推薦等での進学を希望する生徒や就職を希望する生徒については、必要に応じて面接や論文等の指導を繰り返し行った。これまでコロナ禍でインターンシップは実施できなかったが、今年度は希望者は1名のみであったが企業の協力を得て実施することができた。英検、漢検、ニュース検定、ワープロ検定を推奨しているが、合格者数はそれぞれ昨年度を下回ってしまった。(英検 14→8、漢字検定 35→13、ニュース検定 4→3、ワープロ検定等 211→139)

【学校評価アンケート結果より】

進路指導について

- ①「本校は、外部講師の話などによって、自立に十分な収入を得るための様々な選択肢を紹介してくれる点で、進路指導が充実している。」という内容の質問に対して 82.3%の生徒が肯定的な回答をしている。教員は 63.3%の教員が肯定的な回答をしている。保護者は 64.7%が肯定的な回答をしている。
- ②「本校は、生徒たちの進路について、自立に十分な収入を得られる道に進めるよう、親身の指導を行っている。」という内容の質問に対して 82%の生徒が肯定的な回答をしている。教員は 66.3%の教員が肯定的な回答をしている。保護者は 64.7%が肯定的な回答をしている。
- ③「本校の総合的な探究の時間は進路学習に役立っている。」という内容の質問に対して 80.2%の生徒が肯定的な回答をしている。教員は 59%の教員が肯定的な回答をしている。保護者は 56.8%が肯定的な回答をしている。
- ④「本校が掲示やパンフレット等で知らせてくれる進路情報は、自分の適切な進路選択に役立っている。」という内容の質問に対して 78.6%の生徒が肯定的な回答をしている。教員は 60.2%の教員が肯定的な回答をしている。保護者は 66.6%が肯定的な回答をしている。

③生活指導

ア 都立高校生活指導指針及び本校の生活指導規定に基づき、組織的に時間を守る指導等、基本的な生活習慣を確立する指導を徹底する。また、自他の生命を尊重する精神や意識を育て、自他の生命の大切さを認識させ、いじめを防止し、安心して安全な秩序ある学校生活を送らせる。

イ 問題行動には適切に指導方針を決定し、当該年次と生活指導部が中心となり指導にあたる。必要に応じて総合支援部や SC、YSW と連携した指導も取り入れ、指導の方針や経緯については学校全体で適切に共有していく。

ウ 「不適切な行為を反省させ、再発防止を図る」指導にとどまらず、「望ましい行動を選択する力の育成」に主眼を置いた指導の充実を目指していく。

エ 基本的な生活習慣を身に付けさせる指導、規範意識を育てる指導、社会性を育む育成を「シチズンシップの育成」として実施していくことで、生徒が自律的に「秩序ある学校生活」を創造できるようにする。

オ 防災教育を適切に実施し、生徒の防災意識を高める。

＜重点目標と方策＞

ア 従来からの授業規律指導、遅刻指導、頭髪指導、身だしなみ指導、マナー指導、挨拶指導、清掃指導等を継続する上で、全教員が統一の基準で指導することを更に徹底する。取組週間を設ける等により、生徒にも学校生活上の課題を理解させ、秩序ある荻窪の学校生活を創造するように取り組みさせる。

イ 特別指導の流れに「個に応じた指導」を適切に位置付けていく。その際、必要に応じて総合支援部や SC、YSW と連携する。また、「望ましい行動を選択する力の育成」に主眼を置いた指導計画を検討し、学校全体で共有し実施していく。

ウ 様々な状況を想定した防災訓練を実施することで、生徒の防災意識を高める。

【自己評価と課題及び改善策】

ア 年度当初のガイダンス期間に生活指導部から学校生活についての生活指導規定と注意事項を確認し、セーフティ教室、薬物乱用防止教室では警察講話を通して指導の徹底を行った。いじめ防止に関しては、3回のアンケートを行い、困ったことがある等の回答のあった生徒に対する面接等を生活指導部と総合支援部、年次担任が連携し行った。遅刻指導については、登校時や下校時での統一した指導は行わなかったが、基本的な時間を守る指導は年次を通じて行うことができた。学校生活の安全のため年間で巡回当番を設けて校外を巡回し、学校内での異変に対して注意を促した。この校内巡回を通して遅刻しがちであったり、授業に気が向かない生徒に学校生活における基本的な生活習慣を指導していき

い。頭髪指導は、考査期間等に定期的に生活指導部や年次が連携して行った。また、生活指導部研修を通じて本校の頭髪指導について共通認識を持ったり、頭髪を含めた規定全体について見直しの規定を改めて整理し、生徒会、保護者、地域の意見を聞き点検を行った。今後、頭髪指導の必要性と、個に応じた指導の矛盾の有無や、本校の頭髪指導の進め方を検討し共通理解して行っていく必要がある。次年度の頭髪指導については、地毛登録（任意）を廃止する。そのため、生徒の現状を間違いなく把握するなど、より丁寧な指導を行う必要がある。

イ 問題行動に対して個に応じた指導を工夫するとともに、公平な指導を行うことができた。生徒の特長を正確にとらえてより効果的な指導を行うことを目標に生活指導委員会で当該年次教員のみではなく、他年次教員、総合支援部などが関わり議論することにより、問題行動の反省から今後の高校生活の目標を持たせる指導ができた。また、誰もが安心して登校でき、安全に学べる学校を目指し、喫煙行為や近隣への迷惑行為を防止するための注意を数回行った。

ウ 避難訓練は4回実施し、それぞれ地震、地震による火災、火災、大雨・洪水を想定した。防衛省、自衛隊東京地方本部の協力により自衛官の方を講師に招き災害時に実際に自衛隊が使用する非常食や、防災グッズなどを見せていただき、また非常用テントの設営見学や体験をするなど生徒の防災意識を高めることができた。消防署との連携では、消火器による消火訓練を実施した。

【学校評価アンケート結果より】

生活指導について

①「本校は、生徒に規律を守ることの大切さを説明し、理解・納得がいくように挨拶・頭髪・遅刻などの指導をしている。」という内容の質問に対して75.5%の生徒が肯定的な回答をしている。教員は69.8%の教員が肯定的な回答をしている。保護者は70.6%が肯定的な回答をしている。

②「本校は、セーフティ教室その他の防災指導をいろいろ行うことで、生徒の安全に力を入れている。」という内容の質問に対して87%の生徒が肯定的な回答をしている。教員は80.7%の教員が肯定的な回答をしている。保護者は74.5%が肯定的な回答をしている。

③「学校は芸術鑑賞教室、文化祭など工夫した行事をとおして学校生活に幅広い魅力を作り出している。」という内容の質問に対して81.1%の生徒が肯定的な回答をしている。教員は80.7%の教員が肯定的な回答をしている。保護者は78.4%が肯定的な回答をしている。

④「本校は、生徒の多くが通学時でも校内生活でも他者に敬意を払いマナーを守って生活している。」という内容の質問に対して70.3%の生徒が肯定的な回答をしている。教員は53%の教員が肯定的な回答をしている。保護者は68.7%が肯定的な回答をしている。生徒の回答と教員の回答に乖離があるケースである。

④教育相談・自立支援

ア SC、YSW・自立支援チーム、学校精神科医との効果的な連携、情報共有を更に充実させていくために、情報共有、ケース会議を効果的に行い、その成果も学校全体で共有し、生徒理解力を向上させる。

イ 多面的な生徒理解、個に応じた指導、複合的な支援を可能とする関係機関との連携により、すべての教育活動に「支援」の観点と取組を広げていく。

ウ 「総合支援部」を中心に、個別に支援を必要とする生徒への対応を強化していく。

エ いじめの未然防止、早期発見と解決に向けた適切な対応を図る。

〈重点目標と方策〉

ア 生徒情報の共有と支援方針を確認する定例会をより効率的、効果的に行う。そのために検討内容を常に当該部署と共有し、全教員参加で課題のある生徒の情報を共有する研修会を年2回実施する。

イ 特に不登校生徒へのアプローチを重点課題とし、本校入学前の不登校経験を越えて「通学」を選択し入学した生徒、入学後に長期欠席の傾向が現れ始めた生徒への支援策を具体化する。保護者や不登校生徒支援機関との連携等から生徒理解を深める。関連した校内研修を行い教職員の知識向上を図る。

ウ 総合支援部が中心となって、個別に必要な支援方針を検討し、YSWとの連携、日本語の指導、通級による指導、学校外での学びの単位認定等の外部機関との連携も含めて学校全体として効果的な支援体制を構築する。

エ 3回のアンケート及び面談等により、いじめの未然防止、早期発見と解決に向け適切に対応する。

【自己評価と課題及び改善策】

ア ファイルサーバーに生徒情報を書き込むエクセルブックを置き、そこに生徒の状況を記録し各教員が情報にアクセスすることができるようにした。書き込み量が大量になるがデータベース的な機能も持

たせることで情報共有の効率化を進めた。さらに、毎週定例の支援方針会議を行い、その情報について必要に応じて支援方針について検討した。支援方針会議は、22回実施した。

今年度は、近隣の子ども食堂に協力して、校内でフードパントリーを実施した。多くの生徒が参加したが、その中には少数ではあるが、何らかの支援や配慮が必要な者もいて、そういった生徒への対応につなげることができた。

イ 不登校生徒への対応は、生徒の状況に応じて定期または不定期の連絡や家庭訪問等を行ったり、支援方針会議で一定の統一的な対応を検討するなどして取り組んだ。その取り組みによって改善した生徒もいるが決め手となるような改善策は見いだせないのが実情である。今後、さらに増えることも予想されるので不登校生徒への対応については、引き続き検討する必要がある。

ウ 通級による指導、日本語支援教育については、昨年度から今年度まで中部学校経営支援センター特別指定校として特に重点的に取り組んできた。その取り組みについては、紀要としてまとめたところである。通級による指導では、今年度は14名の生徒が受講した。連携機関であるGrou-Sから派遣を受けるなどして高校通級支援員と連携し適切に実施することができた。また、日本語支援教育は公文式を活用した学習や日本語能力試験(JLPT)合格に向けた学習等に、日本語指導外部人材活用事業(高等学校教育指導課)やボランティアによる外部人材の協力も得て取り組んだ。よく参加した生徒については、JLPTでN2、N3に合格するなどの成果を得られた。一方で、そもそも日本語習得に対する意欲を高めることは課題として残っている。

エ 3回のいじめに関するアンケートでは、いじめに限らず、気になることや困っていることがある場合に回答できるようにして、該当生徒全員に担当教員や担任、養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーが面談を行い、必要に応じて次の対応を行うことで、早期に問題の芽を摘むようにした。

【学校評価アンケート結果より】

支援活動について

- ①「本校は、生徒が自分や友人関係の悩みについて、気軽に相談して支援を受けられる雰囲気がある。」という内容の質問に対して82.1%の生徒が肯定的な回答をしている。教員は85.5%の教員が肯定的な回答をしている。保護者は70.6%が肯定的な回答をしている。
- ②「本校は、生徒が家庭内での悩みについて、気軽に相談して支援を受けられる雰囲気がある。」という内容の質問に対して82.9%の生徒が肯定的な回答をしている。教員は84.3%の教員が肯定的な回答をしている。保護者は62.7%が肯定的な回答をしている。
- ③「本校は、生徒が暮らしや健康について、気軽に相談して支援を受けられる雰囲気がある。」という内容の質問に対して83%の生徒が肯定的な回答をしている。教員は81.9%の教員が肯定的な回答をしている。保護者は64.7%が肯定的な回答をしている。
- ④「本校の荻窪カフェは、学校生活に新しい魅力を作り出している。」という内容の質問に対して69.3%の生徒が肯定的な回答をしている。教員は53%の教員が肯定的な回答をしている。保護者は56.8%が肯定的な回答をしている。

⑤特別活動・部活動

ア 授業時数確保の観点から、学校行事等の精選、実施の工夫を図る。生徒会活動、部活動の年間指導計画の見直しと充実を図る。その上で、TOKYO ACTIVE PLAN for studentsを踏まえ、体育の授業と運動系部活動により、スポーツへの関心を高め、運動習慣を確立し、基礎体力の向上を図る。

イ 在り方・生き方について考えを深め、豊かな人間関係を育むために、全体計画に基づいた道徳教育を推進する。その基盤として年間指導計画に基づいたホームルーム指導を重視する。

ウ リサイクル活動、地域の公園清掃活動、震災避難所訓練等の地域と連携した活動については、生徒の主体的なボランティア精神や他者に貢献する意識と態度の形成につながるよう工夫を図る。

＜重点目標と方策＞

ア 感染症対策を行いながらもできる限り活動を行い、生徒の主体性と意欲を低下させない指導を行う。特に、運動系部活動において、体育の授業とともに基礎体力向上を図る。また、学校行事、部活動への参加率を高める。

イ 文化祭や芸術鑑賞教室を、生徒の「自他を大切にし協働して課題解決にあたる力や社会の正しいマナーの重要な育成機会」と位置づけ、教員の適切な関与の下で生徒の自律的取組とできるように検討を進める。

ウ 全体計画に基づく道徳教育を推進するベースはホームルーム活動である。在り方・生き方の自覚、豊

かな人間関係の形成等についての具体的な取組をホームルームの年間指導計画に位置づける。

【自己評価と課題及び改善策】

ア 感染症対策を徹底することで校外学習や部活動を実施し、生徒の主体性の育成に寄与した。運動系部活動も活動ができて全国大会に出場するなど校外での活動も通常に近い形で実施した。部活動加入率や行事への参加状況は昨年度とほとんど変わらなかった。

イ 昨年度に引き続き感染防止対策のため文化祭の一般公開はできなかったが、発表や展示、縁日など従来の活動に近い形で参加団体ごとに工夫して取り組むことができた。次年度は、校外にも公開し生徒に達成感や自己肯定感を育みたい。芸術鑑賞教室では東京都の事業である「子供を笑顔にするプロジェクト」により10代を中心に人気のYouTuberを招き講演や交流を行い、自己肯定感を高め、希望をもって人生を生き抜いていくための学びの場とした。

文化祭については、不登校生徒や、登校が安定しない生徒が増えたことや、1クラスの人数が20名程度であることなどからこれまでのような文化祭の形は難しくなっている。また、感染症対策が長期にわたり、教員も、以前の行事の形を知っている者が少なくなっている中で行事を進めていく難しさがある。現状の生徒と、年次担任団と検討を重ねながらすすめていかなくてはならない。行事をどのような教育活動として位置付けるか、改めて検討が必要になっている。

ウ 生徒会を中心に荻窪地域のイベントへのボランティア参加を行うことができた。今後さらに生徒会から生徒に向けてアナウンスを行い、希望者を募ってボランティア活動を行ってほしい。また、学校運営協議連絡会等を通じて地域の情報と高校生の活躍の場を検討できるといい。

【学校評価アンケート結果より】

特別活動・部活動について

- ①「自分は、儀式的行事、校外学習、文化的行事が、自分のどんな力を伸ばすために役立つか理解している。」という内容の質問に対して77.1%の生徒が肯定的な回答をしている。教員は37.3%の教員が肯定的な回答をしている。保護者は70.5%が肯定的な回答をしている。
- ②「部活動による技量の向上や生徒交流に満足している。」という内容の質問に対して39.9%の生徒が肯定的な回答をしている。一方、教員は「部活では概して生徒が充実した部活動で満足した思いができるよう配慮した取り組みをしている」という質問に73.5%の教員が肯定的な回答をしている。生徒はまだまだ踏み込んだ活動を期待していると言えるだろう。
- ③「部活動をしないう時間を、やりたい練習や趣味、グループ活動などに有効に使っている。」という内容の質問に対して61.3%の生徒が肯定的な回答をしている。一方、教員は「本校では、HR・生徒会活動・生徒同士の交流などにおいて、生徒が満足できるような計画的・組織的指導がなされている」という質問項目では47%の教員が肯定的な回答をしている。

⑥地域連携・広報活動

ア 地域行事への参加やボランティア活動を通して、生徒の社会性を育むと共に、地域における学校理解や生徒理解を広げ、学校の教育活動の「見える化」を進めていく。

イ 学校2020レガシー、防災教育、キャリア教育、主権者教育、「人間と社会」を含む体験活動、進路行事等に、地域の人材や機関、教育施設等を積極的に活用する。

ウ 学校ホームページ、学校説明会、授業・行事公開、中学校訪問等の充実を図り、学校の発信力を高める。個別の学校見学、進学相談等の希望に組織的に取り組む。また、オンラインでの情報発信についても推進していく。

＜重点目標と方策＞

ア 地域行事への参加やボランティア活動を通して、生徒の社会性を育むと共に、地域における学校理解や生徒理解を広げ、学校の教育活動の「見える化」を進めていく。

イ ホームルームを中心に全ての教科科目で道徳教育・オリパラレガシー教育に取り組み共生社会確立を目指す。

ウ ホームページ更新、学校説明会、授業・行事公開を積極的に行う。また、個別の学校見学、進学相談等の希望に応じる。

エ Youtube への動画配信を進める。また、他にもオンラインを活用した広報活動等を研究し、実践する。

【自己評価と課題及び改善策】

ア 感染症防止対策のため生徒の地域との交流は桃井第二小震災救援所設営訓練が中止されるなど計画

通りにはできなかった。しかし、昨年度、美術部が近隣の子ども食堂の壁画を描かせていただいたが、今年度もその絵に手を加えるといった活動やフードパントリーの実施に協力するなどの交流を行った。また、生徒会役員を中心に地域の行事にボランティアで参加したり、インターンシップも再開した。感染症拡大が沈静化したときには、さらに交流を広げていきたい。

イ 学校行事では、他者との協働を通して自他を尊重する知識・態度の育成したり、教科指導においても全教科で授業規律を指導したり、例えば、地歴公民科で人間としての在り方や生き方、社会の仕組みについての理解と公正な判断力の育成、保健体育科では実技を通したルールの大切さを学ぶなど道徳教育・オリパラレガシー教育に取り組んだ。

ウ 感染防止対策のため多人数を集めての学校説明会は控えたが、学校見学会、個別相談会を4回実施し234組の参加があった。内容は少人数による動画を使つての概要説明と校内見学及び個別相談で行つたため個別に丁寧な対応ができ、大会場での説明会よりもむしろ効果があったとも考えている。さらに、今年度は、事前予約制でI部からIII部の授業公開を2回と2・3学期には月2回程度のIII部のみの学校見学会（OGIKOU NIGHT TOUR）を実施した。いずれも、感染防止の観点から事前予約の定員制としたため希望した日に参加できない方もいらしたことは申し訳なかった。ホームページの更新は適宜行った（更新回数250回）。

エ Youtube への動画配信等を積極的に行ったが、それ以外のオンラインによる広報活動は外部の対面での広報行事に参加もできるようになったため特に実施しなかった。

【学校評価アンケート結果より】

近隣・地域へのアンケート結果について

①「荻窪高校は生徒の登下校の時間が一日中まちまちとなる、三部制の定時制であることをご存じですか。」については、知っているという回答が80.5%となり、三部制としての認知は確立しているといえる。

②「荻窪高校は、頭髪など身だしなみ指導を強化しています。以前に比べ改善していると感じますか。」という質問に60.9%が肯定的に答えている。従来よりも落ち着いてきたという印象をもっていることがうかがえる。

③学校行事、部活動成果、ホームページ閲覧などについては、無回答や閲覧したことが無いという回答が7割近いなど、あまり関心を持たれていないことがうかがえる。

⑦その他

ア 新教育課程を実施する中で、検証を進め必要に応じて改善を検討する。

イ 育児・介護のための時差勤務や短時間勤務等を取りやすい職場環境を作るなど、ライフ・ワーク・バランスを考慮した学校経営を行う。勤務時間外労働の適正化を含め「働き方改革」を進める。

ウ 新型コロナウイルス感染症対策に伴う課題に対応する。

エ 学習指導、進路指導等へのICT活用や広報活動のオンライン実施等、様々な教育活動及び学校運営において学校教育におけるデジタル技術活用を推進する。これにより、高度化する情報化社会を生き抜く力を培う。また、紙資源消費削減を目指す。

オ 全ての指導において、個に応じた指導方法を研究し、体罰によらない根気強い指導を実践していく。

＜重点目標と方策＞

ア 学校課題解決に必要なPT、WGを設置し、校内公募によりメンバーを決定する。10月までには検討成果をまとめ、企画調整会議を経て12月までに職員会議で周知することを基本とする。

イ 月あたりの「時間外労働」が基準を超える教員をゼロとする。業務の偏りや集中を避けるために各分掌の業務分担整理を5月中に完了させる。

ウ Office365、グループポータルなどのICTを活用し、情報の共有・発信を効率的に行う。また、生徒への学習課題の配信など様々な場面でICTの活用を推進する。これにより、高度化する情報化社会を生き抜く力を培う。また、紙資源消費削減を目指す。

エ 規範意識を高めサービス事故を防止する。

【自己評価と課題及び改善策】

ア 未履修科目の再履修講座の講座数について対象生徒の人数も見ながら検討した。また、未修得科目があった場合に、卒業に不足する単位数を他の科目を履修することによって充足させられるように教育課程を見直した。

イ 出産休暇・育児休業・病気休暇・病気休職・育児のための育児時間や短時間勤務または時差勤務など多くの職員が必要に応じて取得している。また、休日に勤務した場合には他の曜日にへの振り替えも適

切に行っている。勤務時間外労働をゼロにすることは難しい状況があるが、月 45 時間以上の時間外勤務は全体の 8.6%に抑えることができた。9月から各分掌の業務分担整理を行っているが、今後も一層ライフ・ワーク・バランスを考慮した学校経営を行っていく必要がある。

ウ 新型コロナウイルス感染症対策は概ね適切に行ってきたが、オンラインによる生徒の健康観察は十分にはできなかった。

エ グループポータルやファイルサーバーを活用して教員間の連絡や生徒情報共有を行うことで会議を補完している。また、1年次の一人1台端末や2年次以降のスマートホンの学習活動への活用を進めている。これらについては、まだ十分であるとは言えないが、今後も必要な改善を取り入れながら引き続き進めていきたい。

(3) その他の数値目標

- ①履修登録された教科・科目について習得率を80%以上とする。(61% 履修した科目に対する割合は85%であったが、不登校またはその傾向がある生徒が多く未履修率が28%に上っていることが影響している。)
- ②進路の定まらない退学者数を10名未満とし、退学者総数を前年度より減らす。(退学者数 昨年度33→今年度33)
- ③全校生徒の遅刻数を前年度より減らす。(1日当たりの1クラスの遅刻者数の平均 昨年度1.7→今年度1.9)
- ④英検や漢検等の各種検定試験の合格者数を前年度以上とする。(昨年度265→今年度171)
- ⑤第一希望進路実現を目指し、進路決定率85%以上とする。(78%)
- ⑥各分掌は校内研修を年間3回以上実施する。(教務部8回 生活指導部1回 進路部 総合支援部4回)
- ⑦全教員が1回以上授業を校内公開する。(2回の公開授業で全授業を内外に公開・授業力向上委員会主催校内公開13名が公開・年次研修の研究授業10名)
- ⑧全教員が他の教員の授業見学を3回以上行う。(実施できた。)
- ⑨学校説明会参加者数を前々年度以上とし、I・II部の応募倍率を1.0以上とする。(学校説明会参加者数：集合形式の学校説明会は感染防止のため実施しなかった。個別相談参加者234組三部学校見学参加者83組は前年度を上回っている。応募倍率：前期I0.64・II0.78/後期I0.53・II1.08)
- ⑩長期休業日中等の講習・補習を、延べ50講座以上実施する。(夏期講習18講座延べ88回)
- ⑪月45時間以上の時間外労働の教員の割合を10%以下にする。(2月末現在8.6%)
- ⑫全教員が授業でのICT活用を1講座につき月あたり1回以上行う。(1年次は約7割、2年次以上は約6割の講座で実施)
- ⑬支援方針会議を25回以上行う。(22回実施)
- ⑭全教員による生徒情報共有の会議を3回以上行う。(3回実施)
- ⑮学校行事への参加率を前年度比10%増とする。(昨年度70%→今年度67%)
- ⑯部活動への参加率を前年度より増加させる。(昨年度30%→今年度33%)